

「生活で活用できる力」の育成を目指して

～食品の選択に関する「つながり」を生かす指導の工夫～

宮城県 技術・家庭科研究会

名取市立みどり台中学校 教諭 千葉 八代枝

名取市立第一中学校 教諭 荘司 知子

1 はじめに

食に関する学習というと生徒たちは即「調理実習？」という感じでとても楽しみにしている。実際、どの生徒も集中して取り組み、和気あいあいとした楽しい雰囲気でも教師としても充実する時間である。

しかし、今日、各家庭における食事の材料は半調理済食品や加工食品なども含め購入するものがほとんどである。生徒は調理体験に乏しく、ましてや自分だけで調理のための食品を用意する経験がほとんどない。

このような現代において、食品に関する正しい知識や技術を系統立てて学べる中学校の家庭科での食に関する学習は大きな意義がある。調理技術を身につけるためには経験を増やすことが必要である。調理実習は家庭で食事の準備をする機会が少ない生徒にとって貴重な時間である。しかし、健康な食生活を送るためにはそれ以前に自分の意思でよりよい食品を選ぶ力がなければならない。そこで、今回は宮城県の研究テーマ【「生活で活用できる力」の育成を目指して】より、よい食品を選ぶ力と意識を高めさせたいと考え、食品の選択に関する「つながり」を生かす指導の工夫に取り組んだ。

また、よりよい食品を無駄なく選ぶという意識を育てることは、環境に配慮した生活につながり、持続可能な社会に向けての大きな一歩となる。Dの「身近な消費生活と環境」に関連させ、食品に対する感謝の気持ちを持たせ、よりよい消費者としての自覚を高めさせることにもつなげられるよう研究を進めた。

2 研究のねらい

宮城県では今年度が本研究テーマのつながり学習の3年目にあたる。第一段階「気づく」第二段階「考え・学ぶ」第三段階「生かす段階」の第三段階で実践していた『つながり学習』の「生かす」に焦点を当て研究を進めている。

授業において学校と家庭、学校と地域、家庭と地域、学校間のつながりを明確にし、それぞれの「つながり」を生かす段階の工夫を行うことで、生徒に生活をより良くする力（活用できる力）を身に付けさせられると考えた。

3 研究の方法と内容

(1) 研究の方法

本研究の第三段階「生かす」に迫るため、ワークシート、指導過程の工夫を取り入れ、以下の2点に重点を置き実践した。

① 疑似体験的な内容の授業の工夫

*実践1

生活体験が少ない生徒に疑似体験ができるような授業展開を構成し、自分のこととして課題を捉えられるようにした。

② 調べたり体験したりする授業づくり

*実践2

生活の中から、課題解決を追究する（考える・感じる）→グループで話し合う（情報収集）→クラスでまとめる（情報整理）→自分で振り返る（日常生活に生かす）というような授業サイクルを実践した。

(2) 研究の内容

① 実践1：生鮮食品の選択を中心とした授業

一人でスーパーに買い物に行く体験の少ない生

徒に、実際のスーパーの映像を見せながら疑似体験する授業展開を行った。学習した内容を買物に生かしながら、より良い生鮮食品の選択ができることをねらった。具体的に疑似体験をすることで分かりやすく、楽しく興味をもって生鮮食品を中心に目的に合った食品を選ぶことができると考えた。

② 実践2：加工食品の選択を中心とした授業

加工食品のパッケージの情報を読み取ることから学習を深め、さらに調べ学習を取り入れたり、実際に試食や試飲をしたり、調理実習と組み合わせたりしながら加工食品の選び方について理解を深めさせる授業を工夫した。

4 授業実践例

実践1：生鮮食品の選び方を中心とした授業実践 名取市立第一中学校2年での取り組み

(1) 題材名「生鮮食品の選び方」

(2) 生徒の実態と題材について

① 生徒の実態

全体的に食生活に興味があるものの、日頃、買い物に行くことがあるかとの問いに、「ない」と答えた生徒は各クラス半数以上であった。「ある」と答えたわずかな生徒も、購入するものとしてはお菓子や飲み物などの嗜好品のみで生鮮食品を購入する生徒はほとんどいなかった。

② 題材について

生鮮食品を購入するという経験が少ない生徒のために、スーパーマーケット内の映像を視覚的に捉えさせることで、実際に食品を選択する場を設定し、疑似体験させた。

③ 展開例

地域の店舗の協力を得て、店内の生鮮食品の映像を撮影しその映像をパワーポイントでまとめ、スーパーマーケットにおける購入場面を想定できるようにした。店内図（プリント）も見ながら実際にスーパーマーケットで買い物をしているような疑似体験をさせた。

家族構成、作る料理、買い物に必要な生鮮食品を提示し、売り場には同じ食品でも数種類あることから、値段だけではなく、どのようなことをポイ

ントに選ぶのかを考えさせた。

その後、グループで各自の考えを互いに確認し、まとめた意見を発表させた。

授業のまとめでは、疑似体験を通して生鮮食品のそれぞれの選ぶポイントを全体で確認した。



(3) つながり学習の三つの段階

① 「気づく段階」

生鮮食品を購入する機会がない生徒たちに、食品がどのように販売されているのかをスーパーマーケットに行くという疑似体験を通して、映像で生鮮食品を提示することで生徒の興味、関心をひき、実際に買い物をしているような雰囲気を体験させることができた。

② 考え・学ぶ段階」

生鮮食品を選ぶポイントを各自がワークシートに記入し、グループで意見交換をすることで考えを深めさせた。さらに、映像を通し視覚的に生鮮食品を選ぶポイントなどを提示することができた。（例：色、傷の有無、はりがあるかなど）

③ 「生かす段階」

お互いの考えを知り、生鮮食品を選ぶポイントについて自分とは異なる観点もあることを知った。また、学習した内容を家庭生活で生かし買い物や調理の場面等で実践することができるようにした。

実践2：加工食品の選び方を中心とした授業実践 名取市立みどり台中学校2年での取り組み

(1) 題材名「加工食品の選び方」

(2) 生徒の実態と題材について

① 生徒の実態

団地の中にある中学校で、全員が一戸建ての家に住んでおり、経済的には恵まれている生徒が多い。団地の中にはコンビニ以外のスーパーがなく、位置的にも高台にあるため、ほとんどの買い物は家族と一緒に車で行き、家族が購入している様子などは見ているが、生徒自身が購入する経験は少ない。しかし、授業には意欲的でより良いものを購入するポイントを知りたいという生徒が多い。

③ 題材について

買い物に行く経験の少ない生徒がほとんどのため、どこの家庭にもある加工食品のパッケージから展開していく授業を組み立て実践した。繰り返し加工食品について選ぶ場面を意図的に設定することで、学習内容が定着し生活に生かせるように工夫した。(3) 指導展開

| 時間 | 学習内容 | |
|---|------|--|
| 1 時 間 目 * 資 料 1 気 づ く | 題材 | 【パッケージから情報を読み取ろう】 |
| | ねらい | ・さまざまな加工食品の表示について理解を深める。 |
| | 方法 | ①1つのパッケージの情報をすべて切りとる。 ②A3の用紙に貼り、レポートを作る。 ③表紙と裏表紙をつけ、考察を入れる。 ④1つ1つのマークや表示の意味を記入。 |
| 2 時 間 目 考 え ・ | 題材 | 【食品添加物って何?】 *資料2 |
| | ねらい | ・食品添加物についての理解を深める。 |
| | 方法 | ①パッケージのレポートの原材料名を抜き出し、パソコンで調べる。 ②学習カードにまとめる。 |
| | 結果 | ①自分が食べているものにどのようなものが入っているのか確認できた。 |

| | | |
|-------------|--|--|
| 学 ぶ | | ②食品添加物のはたらきや健康とのかかわりなどを知ることができた。 |
| | 3 時 間 目 | 題材 【食品添加物を体感しよう】 *資料3 ねらい ・食品添加物と食品の安全について関心を高める。 方法 ①「ハムのテイスティング」3種類のハムを食べ比べる。 ②「手作りジュース」果汁が入っていないレモンジュースを作る。 |
| | 生 か す | 結果 ①3種類のハムの味を比べることで、表示を見ることや原材料の理解を深める。 ②クエン酸・着色料・甘味料・着色料・水を入れ、手作りのジュースをつくり、食品添加物について理解を深める。 |
| 生 か す | 題材 【肉の調理をしよう】 *2時間 ねらい ・ハンバーグを比較しよう 方法 ①肉の特徴を理解しながら、ハンバーグを作り、市販のハンバーグと食べ比べる。 ②それぞれの材料を比べ味の差に気づく。 ③ハンバーグを購入する時のポイントを考える。 | |
| | 結果 ①手作りのハンバーグには材料が少ないということに気づいた。 ②ハンバーグを購入する時にはどのようなことを考えるとよいのかわかった。 | |

(3) つながり学習の三つの段階

① 「気づく段階」

1時間目の「パッケージから情報を読み取ろう」で、加工食品のパッケージの情報を切り刻んでレポートを作ることで、食品と情報のかかわりについて気づかせることができた。

資料1



② 「考え・学ぶ段階」

1時間目に調べたレポートから、原材料の表示

を抜き出しパソコンで調べた。材料の食品添加物の特徴を調べた。初めて今まで食べていた材料の食品添加物について知ったという生徒が多かった。

資料2

| | |
|--|--|
| | <p>・原材料がありすぎて、写すのも大変だと実感していた。また、調べていくうちに食品添加物のとりすぎなど注意点にも気づいた。</p> |
|--|--|

④ 「生かす段階」

3時間目の「食品添加物を体感しよう」では実際に3種類のハムを食べ比べたり、果汁の入っていないレモンジュースを作ったりすることで、具体的に食品添加物を体感させた。実際に食べる体験は、インパクトがあり、購入時に表示を見て原材料を確認する意識を強めることにつながられた。

また、肉の調理では、ハンバーグを作り、市販品と食べ比べ、それぞれの特徴などを理解し購入する態度を身に付けさせられた。

学習カードに市販品のハンバーグを購入する際のポイントを考えさせる項目を設けたことで、消費者としての意識を高めていくことができる。繰り返し学習することで日常生活に生かされ、つながっていく。また、意識が高まることは知識や技術が定着していることであり、将来必要な時に生かすことができる。

資料3

| | |
|------------------------------|--------------------------------------|
| <p>・3種類のハムをA・B・Cとし食べ比べる。</p> | <p>・市販品を最初に食べ、その後自分のハンバーグを食べ比べた。</p> |
| | |

5 まとめと今後の課題

(1) まとめ

実践1の疑似体験を取り入れた生鮮食品の選び方では、買い物体験の少ない生徒にとって具体的に考えやすい内容で、次に買い物に行く場面がイメージしやすく生活体験を広げることができた。

さらに、長期休業中に、「家族のための食事作り」として、さまざまな食品を使い料理をする課題を設定し、生活で活用させる力を伸ばさせた。各自が料理を作るために学習した内容をもとに、買い物をすることで、生活で活用する力となると考えた。また、家庭によっては、生鮮食品を購入せず自家菜園で育てた野菜などを使用したりすることで店舗販売されているものよりも、新鮮な生鮮食品を身近に感じながら料理をすることも考えられる。生徒一人ひとりが、さまざまな環境のもとで家庭生活を送っているため、今回の授業を通し、生徒が将来、自立した生活を送るときに学習したことが生かされるように期待したい。

実践2の加工食品の選択では、身近にあるパッケージのレポートから授業を広めることで、食品添加物を含む材料について理解を深め、食の安全についても意識を向けることができた。また、消費者としての観点から、よりよい商品を購入することが環境により生活につながるということに関連させることができた。

どちらの授業実践も生徒が自らの生活を振り返り、課題を見つけ、よりよい生活につながるための力を身につけることができた。つまり生活に「生かす」ことにつながった取り組みになった。

(2) 課題

つながり学習を進めることで、課題を捉え、考え自分の生活に広めていくことができた。しかし、食品の選択に関しては、単発的な授業で終わるのではなく、繰り返し意図的に授業に組み入れていくことで定着していくと思われる。

食品のみならず「選択する」という行為は生活の中心を占めるものである。家庭科では、消費者の視点を取り込んだ学習内容を組み立てていくことが必要である。また、家庭科で学ぶことが自分自身の生活の向上と充実につながることを実感させることが意欲につながる。「生かす」ことを意識しながら、実際に生活の中で直面した課題等に学習した内容を生かし、その内容を将来に生かそうとする意識を高められるよう、今後も授業の内容を工夫していきたい。